

# 生まれ変わるエネルギー環境教育

北大エネルギー教育研究会  
(札幌市内小学校教諭)

## 【カリキュラムの再構成が動き出した】

私たち北海道のグループ(研究者、専門家、小中高の教員)は、2008年度から2010年度にかけて「教育課程に位置付けられたエネルギー環境教育」の小学校版、中学校版の学習プログラム(パッケージプログラム)を開発し、実践による検証を行ってきた。一方、3.11以来、全国的にエネルギー教育の実践が沈滞化している。4%しかエネルギーを自給していない我が国にとって、エネルギー教育は必須のものである。看過してはならない状態である。

私たちは3.11以降、放射線の正しい理解を進めるための学習開発を行ってきた。この中で痛感したのが、現在の状況に即したエネルギー環境教育の全体像(カリキュラム)を示さなければ、教育実践は広がっていかないということである。そこで、先に開発したパッケージプログラムを、現在の状況に対応しながら、コンパクトで誰でも無理なく実践を進めていけるカリキュラムに生まれ変わらせることをめざしている。

4+1=カリキュラムを再構成の視点

では、新しいパッケージプログラムは、どのような学習内容で構成していけばよいのだろうか。エネルギー環境教育は、どの学校でもどの地域でも取り組むべきものである。そのため、義務教育のカリキュラムに位置づくように学習内容を構成しなければならない。

私たちは、カリキュラムを構成する単元として、次の内容を考えている。

- |                      |
|----------------------|
| ①身の回りにある様々なエネルギー(存在) |
| ②くらしの中での便利さの追究(有用)   |
| ③資源の有限性とリスク(有限・リスク)  |
| ④人間の知恵、科学と技術(夢と未来)   |

これに加えて、もうひとつ学んでいかなければならないことがある。それは、「⑤放射線の正しい理解」である。これは、特に小学校段階では、指導要領下の学習として位置づけることは難しい。しかし、放射線についての正しい理解がなければ、3.11以降の日本のエネルギーの状況を捉えて、日本の未来の方向性を考えていくことはできない。

学習の最後に総合的に考えてみることによって

「4+1の学習」を学んだ上で、総合的な学習の時間のフィールドを用いて「持続可能な社会」「電源のベストミックス」を小学校段階、中学校段階でそれぞれ考える学習を設定している。

「20年後の日本の電源の割合をどう考えるのか。」と、ベストミックスを考えることは、児童生徒が自分の未来を生活と結びつけて考えることである。そこには、正解はないが、空想論に陥ることなく、現実を意識した上で考え議論をしていくことが重要になる。

このような学習活動を経ることによって、次のような資質能力が育つものと仮設している。今後、実践を経て検証していく。

- (1) いろいろな視点から検討できる能力
- (2) いろいろな立場から考え、バランスに基づいた判断力
- (3) 環境の変化を敏感に感じ取り行動する力

### 【人のつながりの重要性】

一方、3・11以降の実践の停滞は、全国的なスケールで形づくられつつあった各地域の研究者、専門家、実践家のつながりを希薄なものにしてしまった。福島の事故以来、学校でのエネルギー環境教育は、出来事の大きさや複雑さ故に、実施されにくい状況にあるし、このままではエネルギー環境教育そのものが教育課題から消えていく可能性すらあるからである。やはり、皆の努力で構築してきた実践校事業や推進会議事業がストップしている影響は大きい。

この状況で座して待っている訳にはいかない。そこで、北海道の実践者の結びつきを取り戻すべく、経済産業省資源エネルギー庁からの委託事業である草の根 NPO 等活動の支援を受けエネルギー環境教育セミナーを開催し、道内各地域の実践家とのつながりを再構築している。昨年は、函館地区と北見地区、今年度は前期の2地区に加えて旭川地区と釧路地区にも歩を進めていく。また、放射線教育支援サイト「らでい」等への投稿、日本エネルギー環境教育学会の全国大会での発表やパネルディスカッションの企画など、積極的に私たちの研究を発信することで、人的なつながりを再構築したいと思っている。